

浄土

1988—7

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授受記録誌）第三五号
昭和六十三年六月二十五日印刷 昭和六十三年七月一日発行
第五十四卷 七月号





七月の秀句

口紅のいささか濃きも涼しけれ

久保田万太郎

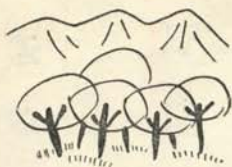
浴衣着て少女の乳房高からず

高浜 虚子

風の樹々プールの子らに騒ぎ添ふ

石田 波郷

|| 七月号 ||



その仏の国土には、なお三悪道の名もなし。

——『阿弥陀経』

目 次

——特別連載 第3回——

中国の道教と道教文化……………王 明…………(2)

〔解説〕安 居 香 山

〈ずいそう〉

六 字……………大 橋 英 正…………(12)

=にこにこ話③=

ミーちゃんの通信簿……………長谷川 岱 潤…………(21)

《四行詩》

浴 衣……………清 川 宗 治…………(19)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <16>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一…………(28)

——我が思い出に住む犬たち(2)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第49回……………寺 内 大 吉…………(35)

弥 陀 の 化 身

挿絵 松濤 達文

表紙絵 小林治郎画

中国の道教と道教文化

中国社会科学院哲学研究所

研究員 王 明

〔解説〕 安居香山

（大正大学学長）

(3) 道数の文学芸術

先ず道教文学であるが、その主なものは、詩と詞である。魏晋南北朝時代から、唐、宋、

元、明に至るまで、その詩文は非常に多く、影響も頗る大きい。例えば、齊梁時代、茅山の上清経派の宗師である陶弘景は、詩文にも優れていた。彼は齊の武帝が山中には何があ

るかという質問に対して、詩を作つて次のように答えている。

山中何所有、嶺山多白雲、只可自怡悅、不堪持贈君。（山中にあるものは何か、嶺山には白雲があるだけだ。只自ら楽しみ悦ぶだけのもので、君に贈れるものではない）

何と清逸閑適な詩であらう！

北魏、北齊の時代には、神仙道の詩が非常に多くなる。例えば『老子化胡通』の中の「老君十六變詞」などである。

唐代は詩の全盛期であつたので、沢山の詩人は道教と切つても切れない強い縁で結ばれている。例えば、呉筠（ごいん）（七七—七七八）はもともとと儒者であつたが、詩をよくし、後に河南の嵩山に入り、潘師正に師事して道士となつた。彼は『玄綱論』など、沢山の仙道を讃える文章や遊仙詩を書き、道教思想を宣伝したので、その影響は非常に大きかつた。呉筠は又大詩

人李白と仲良しであつた。李白の詩の中にも、常に仙道との関わりがみられ、後世に詩仙と称されている。このような状況は当然唐の皇室が、特に道教の教祖——老子を崇拜していたことと密切な関係があらう。

宋代に至つて道教文学は、更に大きく發展した。ここでは大詩人蘇軾（そしき）の例を挙げよう。蘇東坡も数多くの道士を友人にもつていた。彼には道教の名山や宮觀、例えば中州の仙都觀、余杭の洞霄宮、山東の蓬萊閣、広東の羅浮山などに遊んだ時に詠んだ詩が沢山残っている。蘇東坡はかつて『黃庭内景經』を書写し、又終南山の太平宮で『道藏』を読んだ。又晩年には、養生の方術の実践に頗る心をくばつた。それどころか、彼は夢の中でさえ、仙人と神仙の方術を論じ合つたという。

金、元代になると、全真道教の全盛期を迎える。王詒（わうぎやう）は陝西省の終南山をその根拠地と

し、その後山東の寧海州に至り、信者を集めて伝道した。高弟には、馬鈺、譚処端、郝大通、王処一、劉処玄、丘処機などがおり、彼らは各々詩集があり、後世に大きな影響を及ぼした。その他、元の時代は道士の中に、詩文に秀でた者が多く、尹志平、李道純、楊明具、王道淵なども、各々詩集を著している。

戯曲や小説の方面においても、仙道物語をテーマとする作品が非常に多い。例えば、元代の劇作家——馬致遠が書いた『呂洞賓三醉岳陽樓』や、明代の小説『封神演義』などはその代表的なものである。

道教の芸術作品も非常に多いが、今にのこるものは非常に少ない。例えば現存している江蘇省蘇州市玄妙觀の老子像は、唐代の有名な画家——吳道子の画いたものである。それから山西省芮城縣永樂宮の巨大な壁画は元代のもので、これらは最も貴重なのであろう。

永樂宮の巨大壁画の模写品は、かつて日本で展覧されたことがある。本当に世にも稀な宝物と云うべきであろう。

〔解説〕 道教の文学・芸術への影響は多面である。唐宋伝奇小説などへの影響を研究するためには、道教を知ることなくしては、不可能といえるほどである。

王明先生は、流石に道教研究の権威者らしく、簡略ではあるが、広い範囲にわたって書いておられる。できればこうした面について、更に充実したものを書いて欲しいものである。仏教とのこうした面での紹介もして欲しかった。

(4) 道教の名所旧蹟について

道教の名所旧蹟について言えば、宮、觀、碑、銘文の多くは皆中国の名山に残っており、それは一種の物質文化とも云える。それらの名所旧蹟は、今本来の姿をうかがうことは困



——嵩山の中岳廟——

難なものもあるが、已に修復されているものもある。幸い文献に記載されているので、考察することが可能である。従来、道教徒達は、修行したり、金丹を煉造する時、その多くは深山に幽居し、世俗や雑事の煩わしさから避けたのである。

中国の五岳——即ち、東岳の泰山、西岳の華山、中岳の嵩山、南岳の衡山、北岳の恒山は、国内外に知られた大山である。その中でも、河南省登封県の境内にある嵩山の中岳廟は、中国における道教の最も大きな聖地の一つで、同時に、仏教少林寺の所在地でもあり、そこには名所旧蹟が非常に多い。嵩山洞は道教三十六の洞天の一つである。北魏の有名な道士寇謙之が、かつてこの山洞で修行をしたところである。

華山は陝西省華陰県にあり、ここも道教の聖地である。華山は断崖千尺、雄大且つ險要

で、総仙洞天という。この山は道教との関りが非常に深く、東漢時代に『西岳華山廟碑』があり、金代には王処一の編集した『西岳華山誌』がある。元代には張栻が『太華希夷志』を書いている。この山に入って修行した道教徒は甚だ多い。とくに世に知られているのは五代の陳搏で、彼は華山に入って修行し、『無極図』を華山の岩壁に刻んだ。それは宋初期の道学者周敦頤の『太極図説』に影響を与えた。宋の詩人陸游が「天下の名山は唯華山、茅山、青城山などの僧寺あるのみ」と詠んだが、それによってもわかるように、華山は道教徒が独占した名山の一つである。

東岳の泰山は山東省泰安市にあり、蓬玄洞天という。山上には碧霞宮があり、泰山の仙女碧霞元君が祭られており、有名な道教物語の一つでもある。

南岳の衡山は湖南省衡山県にあり、朱陵洞

天という。連綿と山峰がそそりたっている。ここは唐の道士司馬承禎が、かつて修行したことのある由緒ある名山である。

北岳の恒山は、山西省渾源県こんげんにあり、総玄洞天という。言い伝えによれば、唐の八仙の一人である張果が、この山で修行したということである。五岳以外に道教では、まだ「十大洞天」、「三十六洞天」と呼ばれているものがあり、それらも概して景勝の地や名山の間に点在し、多くの神仙が統治した場所でもある。「十大洞天」について概略してみよう。

第一の洞天——王屋山洞は河南省洛陽市の北王屋にあり、唐の明皇が司馬承禎に王屋山の中で最も景勝の地を選ばせ、そこに壇室を築いて住んだという。

第五の洞天——青城山洞は四川省灌縣かんにある。風景すこぶる幽勝で、山頂に天師洞があるので有名である。伝えるところによれば、

東漢の張陵が、この後の山に廬を築き、伝道したということで、漢、唐以後、多くの道教徒がここに来て修業した。宋代農民蜂起の首領王小波、明末の張献忠の部隊も、かつてこの山に駐在していたことがある。

第七の洞天——羅浮山洞は、広東省博羅県にあり、東晋の葛洪がかつてその山で煉丹をつくり、著述した場所である。朱明曜真洞天という。

第八の洞天——句曲山はまた茅山とも呼ばれ、江蘇省句容県にある。金壇華陽洞天という。東晋の許穆や梁の陶弘景、それに唐の呉筠などが、かつて修行したところである。

「三十六洞天」と呼ばれるものの中には、上述のもの以外に、まだ有名なものは四川省峨嵋県にある峨嵋山の虚陵太妙洞天、江西省九江市にある廬山の洞虚詠真洞天、福建省建陽県にある武夷山の昇真化玄洞天、浙江省縉雲県

にある仙都山（古名縉雲山）の玄都祈仙洞天などである。なお、仙都山にはその山頂に独峰石があり、南朝の謝靈運がその著『名山記』にその記事を残している。此山は有名な景勝の地で、洞、碑、宮、観ともに雄大且つ優美である。唐の韋軫、陸龜蒙、皮日休、白居易及び宋の沈括、朱熹など、皆この地に遊び、記録を残している。

道教には上述の「三十六洞天」以外に、まだ諸真人が統治した「七十二福地」というのがある。例えば、「崆峒山」は甘肅省平涼市にあり、伝説によれば黄帝もその地に行ったことがあるという。道教の発源地の一つである。「武当山」別名「太和山」は湖北省均県にあり、これも中国道教の聖地である。明の洪武年間に道士張三豊がこの山に廬を結び修行をした。明の永樂皇帝は、かつて武当山に大規模な土木建築を行い、宮観を營造した。

天柱峰の金殿は全てが銅鑄で、鍍金をほどこし、光り輝いていたという。御殿内には真武の銅像があり、重さ約二万斤（十トン）ともいう。像の両側にはべつてゐる神將軍と金童、玉女も、各々の重さが皆万斤を下らないという。この一群の神像は優美で生き生きとしており、その鑄造技巧は、当時の最高の域に達していたことがうかがえる。武当派の拳術は、嵩山少林寺の武術と並んで有名であり、武当山道教徒が代々伝承してきた独特な拳術である。

「竜虎山」は江西省貴溪県にあり、道教の名山の一つで、天師道の教祖——張陵の子孫が代々居住するところで、上清宮などの有名な建築物がある。

「陶山」は梁の陶弘景が丹薬をつくった場所^{ところ}で、浙江省温州永嘉県にある。彼が当時『真誥』を著述したところでもある。

「終南山」は陝西省西安市の南にあり、これも道教名山の一つである。全真道の教祖鍾離樞、呂洞賓や王重陽などが、かつてこの山で修行したところである。終南山の麓に楼観台があり、伝えによると老子が西遊の際、その楼観台で『道德経』を講義したことがあるという。北朝の道士はここに沢山集ったということである。終南山は唐初更に拡大され、「宗聖殿」となり、道教の最も古い宮観の一つである。楼観の周囲には、原始林や人工の森がよく保存され、古樹が天をつく有名な観光地でもある。

「天台山」は浙江省台州天台県にあり、唐睿宗^{すいそう}の景雲二年、道士司馬承禎が桐柏観を建てた。宋の徽宗^{けいそう}の政和六年に更に拡張された。その規模は大きく、中には方丈齋堂、雲堂、土地堂、三真殿などがあり、その他に水力による製粉作業所もある。又六院——即ち経蔵

院、三元院、延賓院、清虛院、白雲院、浴院がある。又、呉越の国王から施捨されたという銅像の天尊が十体、檀香木で彫刻された三清像が一龕など、合わせて二百十六体もある。又銅で鑄造した三清聖像など、正に空前の盛況ぶりであった。それ故、歴代の詩人や道士、例えば唐の李白、羅隱、呂洞賓及び南宋の白玉蟾などが沢山の詩を残している。

「嶗山」。これも道教名山景勝の地である。山東省青島市の東北にあり、山上には多くの奇岩怪石がある。最も大きい道院は太清宮で、古樹に囲まれたその建築は、壮嚴で春夏祭日には観光客が後を絶たない。

その他、山東省蓬萊県には「蓬萊洞」がある。それは渤海に臨んだ景勝の地である。始めて建てられたのは北宋の嘉祐年間で、蓬萊洞、呂祖殿、三清殿、天后宮、竜王宮、弥陀寺などが、山を背にして建てられ、風景実に

壮観である。蘇東坡もかつて登州の太守であった時、この蓬萊閣で後世不朽の名詩を残している。最も珍らしいのは、蓬萊の海面に時おり現れる蜃気楼の幻景である。それを観ると仙境に入ったような気分にしたことが出来る。

「白雲觀」は北京市に現存する最大の道教建築群で、中国道教協会もこの中にある。ここは唐の明皇の開元年間に創立されたもので、最初は「天長觀」と呼ばれた。金の大定七年に修復が行われ、丘処機が西遊から帰京し、そこに住むようになってから「長春宮」と名を改めた。今日の「白雲觀」は長春宮の下院を拡大して建てられたもので、觀内には道教関係の碑や銘文、宝物も多く、内外の観光客の聖地となっている。

(藤原えい子訳)

〔解説〕 道教の寺院（道観）は、戦前まで道教信仰が盛んであったため、数多くのものが全国的にあった。しかし、文化大革命の時、大きな被害を受け、なくなったものも数多い。最近残っているものについては、政府の力で復興されつつある。北京の白雲観なども、その例の一つである。

王明先生は、戦前からの道教研究者で、ここにも多くの道観について説明されているが、果してそれらが昔のまま残っているかどうかは、明らかでない。最近日本の研究者も、相当広範囲な調査を許され、出掛けているが、ここに掲げられているすべてが、残っているかは、これからの調査研究に待たなければならない。

現在中国では、一般の民衆の参拝を許しているが、多くは観光名所の存在となっている。道士もいるが、果して道教が今後どのようなようになっていくかは、こうした道観の歴史と共に、興味ある問題である。

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟理事
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

圖体裁

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（千二百五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇一―四六三

好評の新刷

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山著

B6判 二〇〇頁

定価 一八〇〇円 ㊦ 二〇〇円

△発行▽ 山喜房仏書林

㊦ 130

東京都文京区本郷五―二八―四
(振替) 東京 〇―一九〇〇

(ず)

(い)

(そ)

(う)

六 字



(1) はじめに

◎ 目玉寺院

カトマンドゥー市の西約三キロの地点に、スワヤンブー・ナートという寺院がある。手許の観光案内書によれば、カトマンドゥー盆地を見渡す小高い丘の上にある、ストゥーパ

おお はし えい しょう
大 橋 英 正

(淑徳学園校長
東京・港区長谷院住職)

建築様式の建物で、およそ二千年前に建てられたといわれ、通称、目玉寺院としてよく知られているとある。目といえは、わたくしどもはすぐに五眼を思い出し、肉眼清徹、靡不分了……仏眼具足、覺了法性と、『大経』下巻の語句が頭に浮んでくるが、この寺院にあつては、仏がこの目で正義をまもり、悪者を

懲らしめるといわれている。

また、正面からだけでなく、裏にもこの丘の上まで通ずる路があり、それを登り切ったところに、ゴンバと呼ばれるチベット僧院があり、この目玉寺院と互いに隣りあつており、微妙に調和のとれた景観を呈している。

この目玉寺院の寺域に、円筒形のものが縦に立てて数個ならべられている。軸にさえられており、それぞれが回転できる仕組の、「転輪器」とでも呼べそうな法具である。

参詣者は咒文^{マント}を唱えながらそれをまわし、おまいりをするという寸法である。先年、東京のデパートで開催された「チベット展」では、会場入口にこれと同じものがおかれていた。ごらんの方々は、「アア、あれか」とうなずかれることだろう。

宝筒というのか、筒塔とするのか、恐らくは、ちゃんとした名称があるのだろうが、わ

たくしの言うこの「転輪器」の話しをすると、増上寺の輪藏を連想してしまう。

(2) 輪藏と転輪器

● 輪藏

これは転輪藏とも称し、もともと、大規模な一種の回転書架とも言えるもので、中心に軸を立てて、これを回転することによって、周囲にぐるりと収蔵された經文を閲読する便に供したもので、中国の梁の時代、傳大士^{ダシ}が創造したものと云われる。(宇井伯寿『仏教辭典』)

後世になると、この輪藏を回転すれば、収蔵の一切經を閲読・誦したのと同じ功德が授かるということになった。ご記憶の向きもあろうかと思うが、高祖善導大師ご遠忌の節、増上寺の記念行事に符節を合わせて、それに協賛するかにように、民放各社協同企画のも

とに、「ゆく年・来る年」の一こまとして、大晦日の晩に、講中のご婦人方が、これを旋回している状況が電波にのったことを思い出す。

● 転輪器

一方、こちらの転輪器の場合には、その表面に異形（裝飾性）の梵字に似た文字（ランツァ文字とか言うらしい）が刻まれており、これを回転すると、無量の功德があるとするところは、輪藏と同じく、信者は参詣の都度次に述べる咒文を唱えながら、これを回転するよううで、ネパール訪問の途次、わたくしもここでこの転輪器をまわした記憶が鮮やかに甦ってくるのである。

(3) 六字大明

● オム・マニ・ペメ・フム

最近亡くなられた岩本裕先生の、『仏教入門』（中公新書32）に、

川喜田二郎氏の「ネパール王国探検記」（昭32）に、……いたるところに石板に刻みこまれた、「オムマニペメフム」（オムマニバドメフムとも読む）の七文字、これだけ刻むのでも並みたいではないかと思ふほどである（同書一八五頁）。また続いて、

ここに記される「オムマニペメフム」という句は、もちろん駄羅尼で、
naṃi padme huṃ 「オーム マニ バド
メー フーム」と還元される。（同書一八
六頁）

さきほどの転輪器を回しながら唱える駄羅尼は、実はこの句であった訳である。なおその意味するところは、前掲の川喜田氏の引用文では、『蓮の華の上に栄光あれ。』という意味なんだそうだが、ほんとうはどういう意味かよくわからない、神秘的な、神聖な文句で

ある」としている。

一方、岩本先生は、該博な学識を駆使して、説得力のある独自の見解を示しておられるが、詳細は同書に譲る。なお、「蓮華中の宝珠に栄光あれ」またさらに「蓮華中の宝珠たる者に栄光あれ」という英訳もあるようであるが、ここでは通例に従って、

嗚呼、蓮華上の宝珠（よ）（宇井『仏教辞典』）
オーム、蓮華中の宝珠よ、フーム（同書一八六頁）

と理解しておくことにする。

● 唵・麼拏・鉢訥銘・吽

ある日、必要があつて、仏教辞典を抜いているとき、「六字大明咒」という文字が眼にとびこんで来た。これがいま話題の「オーン・マニ・パドメー・フーム」であつた訳で、漢字で音写すると、

唵 麼拏 鉢訥ニ合 引ニ合 吽引（『仏説大乘莊

嚴宝王經』）

とあり、觀世音の宝号で、「一切の福德・智慧及び諸行の根本」とし、いまに至るもチベットでは、僧俗ともにこれを誦しているとのことである。さらに言うところ、觀音さまを民族守護神とうけとり、篤い信仰を持つ。そのお徳を讃え、み仏のこころを心とし、至心合掌してこの咒を誦し、摂化を願い、あわせて攘災、招福を希求するものなのだろう。

(4) 大明咒と名号

● 六字大明

「国訳一切經」の中で、『仏説大乘莊嚴宝王經』の解題は次のように言っている。

六字大明はチベットラマ教に於ては、日本仏教に於ける光明真言（オン・アボキヤ・ペーロシヤノー・マカボダラ・マニハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン）、弥陀名

号（ナムアマミダブツ）、日蓮宗の題目（ナムミョーホーレンゲキョー）の如くに、一般に用いられ、また大いに威徳あるものとされておるのである。また輪転器を回転しつつ、六字の一々に次の観点をなす。

唵 …… 心を明らむと観ず

麼 …… 性を見たと観ず

拏 …… 生を衛ると観ず

鉢 …… 氣を養うと観ず

訥銘 …… 道に入ると観ず

吽 …… 道を守ると観ず

かくしてまた、一字一字に仏を觀じ、

この仏は自身に具足すと思惟す。

この六字の大明陀羅尼は、これ觀自在菩薩摩訶薩の本心なり、若しこの微妙の本心を知るものあれば、即ち解脱を知ると。

● 名号

直接には全く關係のないように思えるが、同じように六を含むことばとして、わたくしども浄土教の徒としては、六字の名号が当然のこととして思い浮かぶ。また六字名号について言う時には、必ずといってよい程に、善導大師の『観經疏』の次の文を思い起こす。曰く、

無量寿と言うは、すなわちこれこの地の漢音なり。南無阿弥陀仏と言うは、またこれ西国の正音なり。

南はこれ帰

無はこれ命

阿はこれ無

弥はこれ量

陀はこれ寿

仏はこれ覺

なり。故に帰命無量寿覺という。これすなわち梵漢相對するにその義かくの如し。

この了解を前提とし、ますます信を深め、仏の大慈を願ひ、本誓の願を捨てずして摂受し給えとの願ひを鞏固にし、素懷必遂をこいねがい、称名念仏にはげむものであると思う。

● 信相

前者は六字大明の一字一字に、明心・見性・衛生・養氣・入道・守道を観じつつ駄羅尼を誦し、後者は、南無阿弥陀仏を称えつつ、冥加と摂受とを願ひ、名体相即を味倒し、信行具足を体現しようとするものである。

阿弥陀仏・観音菩薩、わが国・チベットまたいま話題のカトマンドゥー、それぞれ、時・処・諸縁の別はあろうとも、めざす高嶺は一つ。究竟するところは唯一つとは言えないだろうか。

(5) おわりに

● 川喜田論文いま一度

思わぬ方向に話がすすみ、その上、語呂あわせをして、言葉を弄んでいるとの非難を受けそうであるが、本人は存外マジメで、ふだん気にしていることを述べて頂いた。理窟っぽい話で申し訳なく思う。

ところで、(8)六字大明で引用した文に続いて、

「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。……」
熱烈なおごそかな合唱が、この高原の世界に充滿しているかのようだ。(同書二〇ページ)。

岩本先生も『仏教入門』のこの『駄羅尼』の説明を終えるに当って、次のように結んでおられるが、それを以て結びとさせて頂く。

やはり、川喜田氏のように、

「南無阿弥陀仏」

としておくのが一番よさそうだ。

まさしく、結帛一行三昧というところ。

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十四巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

四

行

詩

浴衣

涼やかなくつろぎ
はでな絵柄に湯の香がにおう
団扇の音に聴く
母さんのこと あの人のこと

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩人)



◇◇◇住職待望の回向文集◇◇◇

新 諷 誦 撰

編集

白金ブティストクラブ

監修

竹中信常

大室了皓

山本康彦

装丁

豪華クロス張り

コンパクトサイズ

(タテ 十九・三センチ ヨコ 八・二センチ)

内容 諷誦文 十編 下炬文 二編

定価 二二〇〇円 (送料共)

△お申込み▽

〒一四一

東京都品川区上大崎一―九―一

戒法寺内 白金ブティストクラブ

TEL 〇三(四四一)八九七一

FAX 〇三(四四一)八七〇二

に　こ　に　こ　法　話

〔3〕

ミ　ー　ち　ゃ　ん　の　通　信　簿



「ハイイ」

ミーちゃんは大きな声で返事をして先生の
前に行きました。

「はい」

何か言いたげな怖い目つきで先生は、通信
簿を両手で渡してくれました。

悪い予感がミーちゃんの心の中をさっと走
ります。

「ああ、やっぱりだ」

ミーちゃんは思わず声をあげてしまいまし
た。

「ねえ、どうだった」

後ろからトモちゃんが覗き込むように言い
ました。

「算数がこんなに悪いの。私頑張ったんだけ
どなあ」

はせがわ
長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)

「でも、図工5じゃない。いいなあ」

「私、図工だけは自信あるんだ。でも図工じゃねえ」

「一つだって5があるだけいいじゃない。私一つも無いのよ」

「でもトモちゃんは算数と理科が4なんかもん。ぜいたくよ」

「ねえ、私体育が3なんて不満だなあ。算数の3は大満足なんだけどなあ」

横からユミちゃんが口をとがらせながら言いました。

「ユミちゃん、体育得意だもんねえ」

三人が通信簿を見せあいながら話をしていくと、後ろからカヨちゃんが来て言いました。

「ねえねえ、もう成績の話なんか止めてさ、早く帰ろうよ。明日から夏休みよ。みんなはどこか行くの、教えてよ」

「カヨはあいかわらずねえ」

「だって過ぎちゃったことは仕方ないじゃない。それよりさ、予定聞かせてよ」

「そうねえ、それじゃとにかく帰りましょ」

トモちゃんもそう言つて、席を立ちました。ユミちゃんはまだ口をとがらせていましたが、みんなの後ろから、歩き出しました。

ミーちゃんもみんなといっしょに歩いていくのですが、頭の中は通信簿のことではないでした。

「ミーちゃんは、また山形に行くの」

「う、うん、たぶんね」

「元気ないわねえ、どうしたの」

カヨちゃんが心配げに聞きました。

「何でもない、ちょっとがっかりしちゃったの」

「通信簿のことね。私だってさ、親に見せると、やれ下がったのだとか、誰ちゃんよりは上に行ったのとかうるさくてね。はいはい」

て言つて、すぐ逃げ出してきちゃうんだ」

「私も、全く出来ないねえとか、遊んでばかりいるからよつて、もう解かっていることばかり言うもんだから、もう気にしないことにしたんだ」

カヨちゃんも、トモちゃんも一所懸命ミーちゃんを励まそうと思つて、自分の家のことを話してくれました。

「そうじゃないの。うちは通信簿を持っていても、怒られたことなんか一度もないんだよ」

「へえ、うらやましい」

三人は声を揃えて言いました。

「うちのお父さんもお母さんも変わっているのかなあ。通信簿渡すと笑いながら成績が上がつてると誉めてくれて、下がつてると次は頑張りなさいって言われるだけだよ」

「わあ、理想的両親像。爪の垢でも貰つて、

うちの両親に飲ませたいな」

カヨちゃんがおどけながら言いました。

「じゃとうしてミーちゃん沈んでいるのよ」
今度はトモちゃんが、怒つたように言いました。

「だって、成績悪かつたんだもの」

「もう、過ぎたことはくよくよしてもしょうがないじゃない。そんなことを忘れてさ、宿題の対策と遊びの計画ねろうよ」

「カヨちゃん、宿題分担任の考えてるな」

「あたり。私の案ですと、算数と理科はトモちゃん、国語と社会はユミちゃん、工作はミーちゃんっていうのどお」

「えー、カヨちゃんが入ってないじゃない、ずるい」

「ばれちゃった。ねえ、誰かの家でゆっくり考えようよ。私それが決まらなないと落ち着かなくて夏休みにならないよ」

四人は揃ってミーちゃんの家に行くことになりました。

「ねえ、もしさ、お父さんいたら、私たちの前で通信簿渡してみてよ。ミーちゃんの言葉信じないわけじゃないけどさ」

カヨちゃんが小さな声でミーちゃんにお願いしました。

「いいけど、何か恥かしいなあ」

ミーちゃんが勢いよく玄関を開けました。

「ただいま、みんな一緒なの」

「お帰りなさい。みんなもいらっしやい。どうぞお上がりなさい」

「こんにちは、失礼します」

「お父さんいる」

「奥にいらっしやいますよ」

「ちょっと呼んでよ。通信簿渡すからさ」

「後にしたら」

「こういうのは早く済ませたいの」

「しょうがないわね」

「『しょうがたいわね』は、うちの母親の口癖なの」

ミーちゃんが小声でみんなに言いました。

「いや、こんにちは。通信簿だって、それは楽しみだねえ」

お父さんは陽気に出てきました。

「はい、これ」

ミーちゃんが両手で差し出す通信簿を受け取ると、しばらく黙って見ていたお父さんは、にやにや笑いながら言いました。

「いや、ミーちゃんはやっぱりお父さんの子だ。お父さんも算数が嫌いだねえ、数字を見るだけで眠たくなったもんだよ」

「私頑張ったんだよ。勉強の仕方が悪いのかなあ。血筋だなんて言われたら、希望も持てなくなっちゃうよ」

「ごめんごめん。まあくよくよしないでこの

次はまた頑張りなさい。図工は相変わらずいいし、国語や社会だって上がってるんだ。特別悩むことないよ。後はよくお母さんとお話ししなさい。みんないいよ夏休みだね。まあゆっくり遊んでいらっしやい」

そう言うのと、すぐにお父さんは奥の部屋に行ってしまった。

「すごい、出来たお父さん。私すごい感激、いいなあ」

カヨちゃんが開口一番言いました。

「ああ、あんなお父さんだったら、私の性格もっと明るくなっていたでしょうに」

トモちゃんが続きます。

「あなた今だって、充分明るいわよ」

ユミちゃんがちゃちゃを入れました。

四人は大声で笑い転げました。

その晩のことです。お母さんとミーちゃん

は深刻な顔で話しています。

「お母さん、私算数駄目みたい」

「どうしてそんなこというの」

「だって、お父さんだって血筋だって言うてるし、今度だって、私なりに勉強したつもりなのに、ちっとも出来ないんだもん。もうやだ、暗くなっちゃう」

「お父さんがあ言ったのは、あなたを勇気づけるためじゃない。一回ぐらい2になっただけからって、そんなに落ち込んでたらしょうがないでしょ。ほら、元気を出して頑張りなさいよ」

「だって、算数いやになっちゃったのよ」

テレビで野球を見ていたお父さんも、ただごとじゃないミーちゃんの様子に、テレビを消して台所からミーちゃんを呼びました。

「ミーちゃん、どうしたの。いつものミーちゃんらしくないぞ」

「算数出来ないんだもん。いやになっちゃったの」

「ミーちゃんは一所懸命勉強したんでしょ」

「私なりにはしたつもりだよ。でも出来ないんだもん」

「やけになっちゃ駄目。人間はね、結果よりそこまでの過程でその価値が決まるんだよ。」

一所懸命勉強したんならそれでいいんだ。出した結果は一つの通過点なんだから、気にしちや駄目だよ」

「でも、結果には変りないよ」

「ミーちゃん、お父さんが朝いつも読んでいるお経の最後の言葉に、『我行精進 忍終不悔』というのがあるんだ。私は努力を積んでいって、最後は後悔しないって意味なんだ。するべきことをやったら、後は出た結果を受け入れてゆこう。後悔しちや駄目っていうことなんだ」

「仕方ないってこと」

「うん、いい結果が出るには、運もあるってことさ。努力だけじゃなかなか成功はしない。素質と運と努力、この三つがあって初めて成功するのさ。だからこそ、人間の価値は結果よりその過程、努力が大事だってことさ」

「わかったわ」

「『人事を尽くして天命を待つ』という言葉聞いたことあるだろう。さっきのお経の言葉は正にこの意味なんだよ。出た結果を受け入れることは勇気が必要さ。でも結果を受け入れられれば次に踏み出すことが出来るんだ。そしてどんな人に対しても、思いやりをもつことができるんだ。人間これが一番必要なことなんじゃないかな」

「お父さん、ありがとう」

ミーちゃんが、いつもの明るい顔にもどって言いました。

好評

浄土宗勤行の解説

 B6判三六六頁
 価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、
 讀重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺
 悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降
 魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

 B6判四二四頁
 価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

 B6判二九六頁
 価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

 B6判八四七頁
 価六、八〇〇円

和訳浄土三部経

和訳浄土三部経

 B6判四七四頁
 価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選択集

 B6判三八七頁
 価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

 B6判五八四頁
 価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

 B6判二六五頁
 価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

編と訳 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

木

下

隆

一

随

筆

集

16

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(2)—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

もともと腺病質な体質だったから、私は年中病気ばかりしていた。それに加えて、きっかけは何であつたか覚えていないが、ふとしたことから「汚い」と言つては、一日中石鹸で手を洗う子供になつていた。しまいには両手がふやけてしまった程であつた。一種の神経症であろうが、触れるものすべてが黴菌の塊のように思えたのである。

そんな私を救ってくれたのが、我が家で初めて飼つた犬であつた。

「間もなく、うちの犬が子を産むから一匹あげるよ」

と、父の会社の同僚に言われて、父は私の病状を慮つて逡巡したが、

「なあに、そんなことは心配いらんよ。坊やは兄弟が欲しいのよ。次の子供が生まれるま

での繋ぎに犬を与えておきなさいよ」

ずっと後に父から聞いた話であるが、その時その人は事もなげにそう言ったそうである。

「うちの奴は日本犬の血を引いているから、いい子犬が生まれると思うよ」

そして、ある日突然子犬はやって来た。生後二カ月ほどであったかと思う。全身真っ黒で、僅かに前足の間にぼつちり白い毛が混じっているムク犬であった。降ろされるとブルブルっと身震いして、ひとしきり土間の匂いを嗅いでいたかと思うと、ちょっと腰をかがめてジャッとおしっこをした。

「こらこら断りなしにやってしまつて。奥さん、後でここを水洗いして下さい。一度やると、ここでしかやらなくなるんですよ。洋犬は所かまわずやってだらしないんだが、日本犬は決まった所でしかやらないんで……」

父の同僚だという小父さんは、そう言つて笑つた。

「うちでは犬を飼うのは初めてで、よく勝手が分からないんですが、どんな物を食べさせればいいんでしょう」

母が尋ねると、

「もう乳離れしているから、人間が食べ残した物で充分です、多少汁気を多くしてやれば。それから、猫は猫舌つて言いますが犬も同じでね、あまり熱い物はやらんで下さい。人間の子供と違って楽なもんですよ、自分の事は自分で始末しますからね。私ば犬を飼つてつくづく思いましたよ、人間の子供ほど、手間のかかるものは無いって」

子犬は好奇心丸出しで、そこから中嗅ぎ回って探險に余念がなかったが、かすかに揺れている私の着物の裾を見つけると、目を輝かせて飛びついて来た。正直言って私は子犬が恐かった。だから私は母の陰に隠れて出来るだけ子犬から遠ざかるうとしていたのであるが、子犬の方は揺れる着物の裾に興味を持ったらしく、隙あらば飛びつこうと横目でちらちら窺っていたのである。あっと言も間もなかった。裾に噛みつく、満身の力をこめて後ずさりした。子犬とはいえ、意外に力は強く、私は前に倒れそうになって、思わず首を掴む形になった。子犬も驚いたことだろうが、私の方がもっと驚いた。ムクムクしているから定めしよく肥えているに違いないと思っていたのに、私の手に伝わって来たのはゴツゴツした子犬の骨格で、力を入れないといまにも折れてしまいそりな感触だった。

子犬はキャンと鳴いたが、何を思ったのか裾を離すと、前のめりになった私の頬をペロペロ舐めた。不思議だったのは、あれ程黴菌に怯えていた私が、子犬に舐められても不潔と感じなかった事である。無我夢中で抱き上げると、私の腕の中で子犬はしばらくもがいていたが、やがて大人しくなった。そして時々思い出したように私の顎を舐め上げるのであった。「よせ、やめろ」と言いながら、私は子犬を落とさないよう注意を払っていた。汚いか不潔だとか考える暇は私には無かった。ただこの小さい生命を持った生き物を、守ってやれるのは自分しかないんだ、そんな思いで私は子犬を抱きしめていたのである。子犬の体は温かった。

「小父ちゃん、この犬、名前は何と言うんすか」

おずおずと私は小父さんに尋ねた。

「名前はまだつけてないよ。坊やがつけければよいと思つてね」

「お母ちゃん、何にしよう？」

この時になつて、私は初めて子犬の顔を正面からまじまじと見つめた。三角形の耳はまだ完全に立っていない、両方の耳とも先端が前に折れていたが、なかなか愛嬌のある顔をしていて。耳が折れているところから、私はふと「クロベエ」という名を思いついて。母が取っている婦人雑誌に連載されていた「凸凹クロベエ」という田河水泡の漫画から連想した名前であつた。漫画のクロベエは黒兎だったが、片耳の先が折れていた。

「お母ちゃん、クロベエにしよう、クロベエがいい！」

クロベエはやっぱり坊主だつた。飛びついて鋭い爪で着物を引き裂いたり、細い尖った歯でコチコチと指を噛んで私を泣かせたりしたが、このクロベエが来た日から、私の神経症はケロッと直ってしまった。そればかりかいまままでの反動でもあるかのように、クロベエと取っ組み合ひをして泥んこになつたりしても、もう石鹼には見向きもしなかつた。

犬の世話に加えて、私の着物の洗濯や繕いと、以前に比べると母の仕事は一段と増えたが、手をふやかしてうじうじにしている子供を見ているよりは、心労は少なかつたに違いない。クロベエが来たことによつて、私は普通の子供に生まれ変わったのであつた。

昭和十三年四月、私は歩いて十分程の所にある村の小学校に入學した。クロベエも大きくなつて、一時程私に関心を示さなくなつたし、私もまた犬と遊ぶよりは新しく出来た友

達と遊ぶ方が楽しかった。

五月のおわりのある日、たまたま鎖を解かっていたクロベエは、裏戸を開けた御用聞き
の足許を擦り抜けて外に飛び出した。私が学校へ行っている間の出来事だった。その三、
四日前から、夜となく昼となく裏山で鳴く犬の声に應えるかのように、クロベエは切なげ
な声で遠吠えをしていた。それまでも工場のサイレンが鳴ると、それを真似し遠吠えする
ことがあったので誰も気づかなかつたが、クロベエに恋の季節が訪れていたのである。三
日後、クロベエは痩せこけてふらふらになって帰って来た。恐らく飲まず食わずで山中を
さま回っていたのであろう。右耳の付け根と後足には二箇所、明らかに恋仇に咬まれた傷が
あって、血が滲んでいた。

「クロベエや、もう家出なんかおしでないよ、碌な事はないんだから」

傷口に赤チンを塗りながら母はそんなことを言ったが、クロベエは足の傷口の赤チン
を、塗る端から舐めて取ってしまった。

「赤チンより、お前の唾の方が効くのかえ。勝手におし。でも耳の方はそうはいかないだ
ろ、自分で舐められないもんね」

このクロベエの耳は、とうとうピンと立たずじまいだった。戦災で焼いてしまって、古
い写真一枚も残っていないので確かなことは言えないが、日本犬の系統にしては毛が長
かったから、父親はセッターか何か洋種の犬だったのかもしれない。

それはともかくとして、クロベエは一日中腹いっぱい食べて寝ていたが、その夜鎖を切

って出て行ってしまった。それっきりだった。数日後、野犬捕獲人の手にかかったと急を報せてくれた人があって、母が駆けつけた時にはクロベエはすでに橋桁に吊るされていた。「首輪をしているのに、飼い犬と分かっているのに、どうして少しぐらい待ってくれなかったんですか！」

と、母は執拗に抗議したらしかったが、すべては後の祭りであった。

両親はクロベエの死をひた隠しに隠して、

「この前も帰って来たんだから、いまに帰って来るよ」

と私の気持ちを外らそうとしたが、真相はクロベエが殺された翌日、学校で友達から聞いて私は知っていた。しかし、

「そうだね、いまに帰って来るね」

と私は私で、本当の事を言いそびれて沈んでいる母の心情を思つて、逆に慰める始末だった。時には聞こえるはずのないクロベエの声を聞いたような振りをして、表へ飛び出したりもした。クロベエの死を悟られまいとする若い母、知っていながら知らない素振りをしている幼い息子、思えば悲しい底い合いだった。

その年の十月、父はすでに大阪の本社に転動していたが、一家は私の二学期の修業式が終わるのを待って、大阪府の豊中市に転居した。幼年期の私の心に、強い影響を与えて去ったクロベエの思い出との訣別でもあった。

三原を去る日、車窓から見た海は暗く、冷たい冬の色をしていた。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』七月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二―八七

立ち止まるな善導

〈49〉

寺内大古

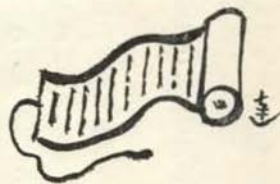
挿絵・松濤 遠文

弥陀の化身

十

「涅槃經」で釈尊が説く「阿闍世のために……とは十惡五逆の衆生を意味する」は初期大乘教団の根本思想を主張していた、と解すべきではないだろうか。

釈尊の入滅を主題とした經典にも各種のものがある。小乗系の「阿含經」にふくまれた小本と、大乘系の「大般涅槃經」——大本とに分れる。また同じ大本系でもパーリ語で書かれた「大バリニッパーナ經」があつて、「大般涅槃經」とは内容が甚だしく異なる。前者を「北伝」と呼び後者を「南伝」とする。特色は「北伝」の「大般涅槃經」が思想



展開を重視し、「南伝」の「大バリニッバーナ経」は淡々と死に至る聖者の姿を描述している。

さて両經典に登場するマガダ国王阿闍世だが、「北伝」は惡逆無道、殺した父王頻婆沙羅の亡靈に悩まされ、昏倒する。遠く離れたクシナガラ（クシナガラ）の樹林でそれを知った釈尊は「阿闍世を救うまでは涅槃に入らない」と宣言したことは前に書いたとおりである。

「南伝」の「大バリニッバーナ経」の阿闍世王はこんな劇的な登場面は全くない。釈尊の入滅を王舎城で聞き知った彼は、涅槃の地クシナガラを支配するマツラ族に使者を送り「導師（釈尊）も王族の出身であり、わたしも王族である。わたしもまた導師の遺骨の一部分を受ける資格がある。わたしもその遺骨を納めたストゥーパ（舍利塔）をつくって、これを祀りたい」と申入れただけである。

阿闍世王の願いはかなって遺骨は分配された。ただし、マガダ国だけではなく八つの部

族に分けられたのである。

わずかに劇的と言えば、マツラ族に遺骨の分配を求めたとき、阿闍世王は麾下の武將に軍勢を引きつれさせた、と西藏本などが付記するにとどまる。

「南伝」は釈尊の死をリアルに史伝的に叙述している。臨終の言葉にしても釈尊は若き仏弟子の阿難に次のことを語っただけである。

——わたしが死んでもわたしが遺した（仏法なる）教えと戒律とが「師」となってお前たちを導くであろう。

——わたしの生前はお前ら同志はお互いを「友よ」と呼び合っていたが、死後はやめねばならない。年長の修行僧を「尊者よ」と呼ぶべきである。

——修行僧の集団内における細末な戒律は廃止してもよい。

こうしたことどもに加えて教団運営の基本方針である仏法に関して、集団生活につい

て、修行の方法や実践については、お互いに「よく語り合つて」と三度もくり返し強調している。

そして最後に、

——さあ修行僧たちよ。お前たちに告げる。「もろもろの事象は過ぎ去るものだ。怠ることなく修行を完成しなさい」と。

これが絶句であつて、以後は若き阿難と盲目の仏弟子アヌルッダが見守るなかでもの静かに涅槃へ入る聖者の姿を「南伝」は描写するだけであつた。

おそらくこれがリアルな涅槃相だったのであろう。人間界の死を、われわれは身近に感ずることができる。

「北伝大般涅槃経」は絢爛豪華、仏教思想の核を舞台いっぱいにくりひろげる。構成も「南伝」の「道行き」物語風ではなく、いきなり沙羅双樹林の臨終場面から書き起こされている。カットバック手法を駆使した一幕ものドラマ調である。

紹介する思想内容は、すでに大衆の間で定着した大乘色を直載に切り出してくる。「南伝」との時差も感じられる。

臨終の迫った釈尊が弟子たちに「仏性」について語るところから始まる。仏弟子のなかには迦葉菩薩も加わっている。この迦葉は著名な大迦葉尊者とは別人であるという。「一切衆生、悉有仏性」——すべての衆生はみんな仏教を持っている、と告命する。

このあと「闍提成仏」や「雪山童子捨身」を説く。闍提(せんだい)とは仏法を信じない謗者を指した言葉で、経典の大半がこの謗法者だけは成仏できないとするなかで、大涅槃の世界は一切衆生悉有仏性の思想から成仏を可能とする。

「雪山童子捨身」は説話風に仏法のきびしい求道精神を語っている。

昔、仏はバラモンの姿で雪山(ヒマラヤ山)中で修行を積んでいた。そこへ帝釈天が悪鬼の姿で現れた。諸行無常の法を説いた。童子

は「蒙が啓かれた」思いで悩んだが、それは真理を解明する半分だけであつた。

「諸行無常の境涯を脱出するには？」

と後半部を促した。悪鬼の帝釈天は、

「それは言えない」

「なぜですか。残りを教えてくれたら私は終生あなたの弟子になるでしょう」

と仏の童子は誓つた。

「じつは空腹なのだ」

「何か食物を探がして来ます」

「わしは人間を食べ、人の皿を飲む。それ以外のものは口にしない」

童子は決意して、

「では私の一身をあなたに献じましょう。だからあとの法を教えて下さい」

「ほんとうにわしにお前を食べさせるといいのか」

「ほんとうです」

そこで帝釈天は生滅々已、寂滅為樂の法を説いて聞かせた。生と滅とが滅しおわって、

そのどちらにもこだわらなくなったとき、生と滅とは近代論理でいう弁証法的な発展を上げて「寂滅」となり、その寂滅自体が心豊かな楽しい悟達の境地になるという。

童子は悩んで帝釈天の言葉、身辺のあらゆる部分に書きとめて、

「さあ、わたしを食べて下さい」

と傍らの大樹へよじ登った。高い枝から身をひるがえし、悪鬼目がけて飛びおりた。しかし悪鬼はたちまち帝釈天の姿になり、童子を空中で受けとめたというのである。

身を捨てても求法する凄まじさを告げた説話である。

こうした物語のあと、阿闍世のクライマックスに至る。

遠く王舎城で失神した阿闍世、彼を救えないうちは自分も涅槃には入らぬ、と釈尊は言いきって迦葉菩薩を驚かせる。

「如来はまさに無量の衆生のために涅槃に入らざるべし。何がゆえぞひとり阿闍世王のた

めにするや」

と疑問を投げかける。

釈尊は答える。

群衆の誰ひとりとして私が死滅するとは思っていない。阿闍世王だけが、私（釈尊）が永遠に死滅してしまうものと信じ、絶望して卒倒したのだ。阿闍世のために涅槃に入るのをやめる。という私の深い意味をお前（迦葉）は未だ理解していない、なぜなら私が「ために」というのは一切の凡夫を意味し、「阿闍世のために」というのは五逆罪を犯したすべての衆生を意味しているからだ。

ここで用いられる「涅槃」なる成語が、その真意をいま理解した人々と、ただ死滅としかとらえられない阿闍世ら凡夫、悪人とに使い分けられている事実に注目しなければならぬ。理解する者と、理解しない者とがいるからこそ「涅槃経」が説かれるのである。いや、阿闍世たち凡夫、悪人は「仏性」の意味さえ理解していないはずである。

迦葉菩薩はようやく釈尊が語る意味を悟りはじめた。以前その説法で聞いた阿逸多の話の思いうかべる。

阿逸多は仏弟子弥勒の縁者だったとも言われる。どんな男だったのであろうか。

十一

阿逸多はバーラーナシー国の長者の子であった。年ごろになると、生みの母親と肉体関係を結んでしまった。さらに母を熱愛するあまりライバルの父親を殺した。ところが母は新たな愛人をこしらえた。阿逸多はその母親をも殺してしまった。

阿逸多には幼いころから精神指導の僧がやとわれていた。僧は彼の行状のすべてを知っており、くり返し忠告し、諫さめた。阿逸多はうるさがり、この僧も殺害した。

このあと出家を思い立った阿逸多は祇園精

舎へやってくる。事情を知っている修行者たちは冷たくあしらって相手にしなかった。怒った彼はその夜、精舎に火を放った。僧坊は焼け、多数の修行僧たちが焼け死んだ。

いよいよゆき場のなくなった阿逸多は、王舎城がある街を乞食となつてさまよい歩く。たまたま釈尊とめぐり遇つた。釈尊は優しく彼の懺悔を聞いてやつた。

ありとあらゆる重罪を犯した男である。ただちに許されることはあり得ないが、自分の傍らにいて、罪業の炎を一つ一つ消すように努力精進せよ、と釈尊はすすめる。阿逸多は悩んで、釈尊の直弟子となり、立派な修行僧になつたという故事である。

阿逸多の母子相姦は、阿闍世王が太子時代にその生母韋提希夫人に寄せた複雑な慕情を思わせる。出生したそもそのとき、この赤児に老仙人の呪いがこもっていると知らされた夫人は、高樓から投げ落したのである。

奇蹟的に小指を一本失つただけで助かった

この王子は、アジャータ・シャトルと呼ばれた。アジャータは「未生」でシャトルは「怨」である。生まれる前から呪われていたという意味だ。漢音で阿闍世となる。正式には韋提訶子——韋提訶はインドの地名で、韋提希夫人の出身地である。

母子の情愛が濃密なのは当然だが、この場合、母はいったん見捨てような振舞いに出ただけにこの子を異常なまでに溺愛する。阿闍世もやがてその秘密を知るのだが、憎しみは屈折した愛となつて、この母を害しきれない。父の頻婆沙羅王は幽閉したあげく悶死へ追いこんでしまふが、韋提希夫人には思いとどまるのである。息子が母親へ傾ける特殊な情感であろう。

母と子と言えば比丘、比丘尼の戒法である「摩訶僧祇律」は晩年の阿闍世王に関してこんな逸話をつたえる。

阿闍世は隣国コーサラの王女ヴァジラーを妻とするが、二人の間に生まれた王子が優陀

夷跋陀羅である。思春期をむかえたころ、この王子は妙な腫物に悩まされる。「この子の陰、虫の喰うところとなり、治するも差（い）えしむる能わず」で男根を毒虫に刺されたためである。「摩訶僧祇律」は続ける。

——時に抱養する者、つねに口を以てその陰をふくみ、暖氣にてこれを嘘（ふ）くに、その痛み少しく差（い）えしかば、しばしばこれをふくんで止めず。彼れ暖氣を得て、即ち不浄を失し、不浄を失するとき、虫即ち精にしたがうて出て、この児、ここにおいて差（い）ゆるを得て苦痛除き愈えぬ。

抱養する者とは、乳母のことである。少年の男根を口中にふくんで暖めてやった、苦痛はやわらぎ、さらに乳母が老練な舌先を用いて欲情を昂めると、少年は射精（不浄を失）したのである。この流出する精液に虫も体外へ

出て快癒したという。
毒虫は放逐したが、少年の肉体に悪習が残った。

——是より以後、つねにこの法を習い、口中に姪を行ずること、かくの如くにして、うたた久し。いまし余の母人を強索して、口中において姪を行ずるに至れり。

王子優陀夷跋陀羅はすっかりこのフェラチオ行為になじんでしまい、年老いた乳母では満足できず、宮廷の若い女性を追いまわし、この行為を強要するようになった。

わが子の悪習に気づいた母親は、ある晩顔を布でおおい、殆んど全裸に近い姿で優陀夷跋陀羅の寢室へ忍んでゆこうとした。たまたま廊下で姑の母后と出会ってしまった。

「何をしようとするんです」
母后は嫁を咎めた。この母后こそは韋提希

夫人であらう。

「……わたしはあの子に口中で快樂を得ようとする行為を中絶させたいのです。そのためには正常な快樂を教えてやらなければなりません」

母親の女体をわが子へ献じようというのである。

「摩訶僧祇律」は比丘や比丘尼のフェラチオ行為を禁ずる戒法を述べただけだが、マガダ国王舎城伝説は凄惨な結末を物語る。

皇太子となった優陀夷跋陀羅は王位継承にあたり父なる阿闍世王を殺した。そればかりか生母の首も引き裂いた。

少年の悪習を封じこむためにわが身を犠牲にした母親の「捨身行為」——その健な気さは、忌まわしい母子相姦の嫌悪、汚濁となつて酬いられたのである。

「摩訶僧祇律」は夜の廊下でゆき遇った姑と嫁との情景を描いて、

——時に姑、訶して言わく「汝、痴狂せしや。何ぞかくの如きを得ん」と。答えて言わく。「狂せず。ただ大家の子は常道を捨ててその口を用う。是の故にこれを履うなり」と。即ちその姑に向いてつぶさに上事を説きぬ。(中略) 王(阿闍世)即ち教令を作さく「今より己去、もしこれを作し、及び他をしてせしむるあらば、まさに重くその罪を治すべし」と。

韋提希夫人も阿闍世王もフェラチオ行為を禁ずるためには、王妃の母子相姦を容認しているかのような筆致であった。そこに阿闍世自身と韋提希夫人との「過去」が暗示されていないであらうか。

それはともかく民を統治する「王」がになわされた原罪を、仏滅後権力の庇護を離れ、沙漠や洞窟内で孤独に成育結晶していった大乘教団は、釈尊の命終に「阿闍世ひとり」を救

いきってしまふまでは、自分は涅槃へは入らない」と言わせたのである。原罪の核心へ迫ってゆく救済思想を經典を制定した。これこそが釈尊「大慈大悲」の根源であると信じた。

釈尊命終の地クシナガラからは遠く隔たった王舎城で昏倒した阿闍世王は、やがてぬくもった月の光りを満身に浴びて目ざめる。

「この心地良い光りは、どこから差しこんできているのか」

阿闍世王は傍らの大臣に問いかける。

「この月光こそは釈尊が、つねに変らず投げかけて下さる愛の光りでありましょう」

「なぜ、そうだとわかるのか」

阿闍世は賢臣耆婆大臣を不思議そうに見つめる。

「光りはあの一点からだけ差ししているからです」

王舎城高樓の夜空を指さした。

だが夜空にいつも昇る月は影も形もなかった。

た。唯一、深奥から突き刺すような光りが発しているのが見える。

「あの光源に世尊はいらっしゃるのか。そこはどこであるか」

「存じませぬ。しかし問うて御覧なさい」

耆婆大臣は釈尊の「月愛三昧」の法だけを熟知していた。つまり月光を全身で吸収し、それを再発光させる神通力である。

阿闍世王の心は釈尊を求め、夜空の光源目ざして遊行する。

「仏よ、仏よ、どこにいますか」

やがて力強い答えが闇の空間から響きかえってきた。

「王よ、阿闍世よ」

「ああ、世尊よ、そこにいましたか。わたしは間違ひなく阿鼻地獄へおちるのです」

「なぜお前ひとりだけが落ちるのか」

「わたしが犯した罪業は限りなく重く深いものだからです」

「王よ、一切の諸法の性相に常なく、決定

☆☆

月愛三昧



(けつじょう) なぞあり得ない。すべてが不定
(ふじょう) である」

「……」

「この世に定まったものはない。すべての存
在が不定であれば、罪惡もまた不定である」

「ああ、ということは阿鼻地獄へおちてもそ
こで苦しみながら精進を重さねば……」

「王よ、わたしとて涅槃へ入らずその阿鼻地
獄で苦しみつつ精進するであらう」

命終の病苦のなかで月愛三昧へはいった釈
尊は、この阿闍世王ひとりのためだけに最後
の慈愛を、その満身でふりしぼっているのだ
った。

経句は阿闍世王に言わせている。

——世尊よ、もし我れつまびらかによく衆
生のもろもろの惡心を破壊せば、我れ
をしてつねに阿鼻地獄に在りて、無量
劫のうち、もろもろの衆生のために大
苦惱を受けしむとも、以て苦とは為さ

ず。

十一

惡逆阿闍世王の決意を、釈尊は褒めたたえ
た。

釈尊が入滅してはば四ヵ月後、王舎城で五
百人の仏弟子たちが集って第一結集を実施し
た。釈尊生前の言行を經典にまとめあげたの
である。これが仏教教団の基礎となる。結集
を実施させた阿闍世王は、最大の外護者、ス
ボンサーの足場をかためた。

ところで「北伝涅槃經」が提示した聖者と
惡王とのやり取りは、仏教の救済思想へ新し
い原則を樹立した。もちろんこの經典が「初
出」ではなく、すでに大乘仏教のなかで熟成
しつつあった救済の本質を、史伝上でさらに
は思想条件として「梵行品」で明確化したの
である。下品下生、極惡人の救済こそが真実

の意味における人類の救いとなる。

小乗思想では、父母を殺したり僧をあやめた五逆罪の悪人は無間、阿鼻の地獄へ転落したまま救われる機会が断絶されてしまう。だが大乗では、どんな極悪人にもその機会が与えられる。地獄へおちた死後にさえ救われる。

日本の親鸞はその浄土思想の核芯に「悪人正機」を唱導した。「善人なお救わる。いわんや悪人をや」である。善人が救われるのだから、悪人が救われるのは当然である。

一見この逆説論理は親鸞の独創ではない。

「お前が阿鼻地獄へ転落するのであれば、わたしも同じところで……」と言いきった釈尊涅槃時の決断が先駆をなしている。

釈尊が「阿闍世ひとりて救うただけに自分は涅槃へ入らぬ」と言いきったことへ迦葉菩薩は「なぜ阿闍世王ひとりだけのために」と反論する。釈尊は「阿闍世ひとりて救えないで、なぜ万人が救えるか」とたしなめても

いる。これは親鸞は「仏はこの親鸞ひとりだけのためにある」という思想回路を形成させた。

かくて「北伝涅槃經」は阿闍世の救いを主題として以後の大乗仏教が主流になった浄土思想の原景を示した。法蔵菩薩の「不取正覚」の誓願は、釈尊の「不入涅槃」と密接に台致する。現実に「観無量壽經」では王舎城の悲劇をそのまま素材として阿弥陀仏の救いを語りかけている。

もちろん極悪人の救いに焦点を絞ったのは仏教の基調たる平等思想を踏まえているからだ。善人も悪人も仏の慈悲を享受する機会は平等である。この点を馬鳴菩薩は「大乘起信論」で強調している。

——もろもろの仏・如来は、かつて菩薩として悟りへの道を歩んでいる時に、一切の衆生へ大いなる慈悲の心を発した。彼らはもろもろの修行を積みかさ

ねながら、人々を救済し教化し、さらに一切の衆生を一人洩らさず悟りの完成へ到達させようという大いなる誓願を立てた。無量の時間を惜しむことなく、未来永劫にわたって、一切の衆生をあたかも自己自身の如く觀察し、衆生と自己の間に何らの差別を認めず、自己のほかに別の衆生が存在するとうような想いがない。それは一切の衆生と自分自身とは本来、平等一味にして無差別であることを覚知しているからである。菩薩はかくの如くすぐれた智慧の働きによって、無明を滅ぼして悟りの完成（仏の位）に到達し、法身を顯現し、衆生を救うために種々の不可思議なる働きを現わすのである。この不可思議なる働きは、真如と同じく一切の衆生に遍満するのであるが、そこには何ら差別の相状として認められるようなものは存在しない。諸仏・如来

とは真如の真相を証得して、すぐれた悟りの智慧をきわめた境地であるから、すべてが悟りの世界の姿として現れており、迷いの心相において認められるような差別世界はなにひとつ存在しないのである。

ここでは、仏も衆生も差別なき世界に住するという根本理念を打ち出している。仏は決して高い地位から余裕ある愛の手をさしのべるものではない。阿闍世王を救うために阿鼻地獄で共に苦悩しようと誓った釈尊ではないか。

このように救う仏がぎりぎりの姿勢で慈悲を作動させるのであれば、救われる側もそれなりの精進でこたえなければならぬ。そこに救いの「往生」と同じような比重で「還相」が大切になってくる。「還相」のない「往相」も大乘思想ではあり得ないことになる。たとえ阿鼻地獄へ転落してもそこで精

進して修行を完成し仏となり、穢土へ還って一人でも多く教化して救おうという氣持を忘れてはならないのである。

明治四十二年、西本願寺の大谷光瑞師が派遣した中央アジア探險隊はその二回目に吐魯番北辺の吐峪溝でおびたしい古写経を発見した。そのなかに、善導が書写した「阿弥陀經」の断片がまじっていた。その断片は二十七葉もあつて原本が尨大な写経量であつた事實を物語り、「阿弥陀經を写すこと数万巻」と善導を讀えた道宣「統高僧伝」の文章を裏付けている。

断片なので全文をうかがい知るためには推理に頼らねばならないが、写経の目的として願文の頭初が「罪病消除、福命長遠」の文字がかざられている。これは罪や病いを消除し、幸福な寿命が長遠だという意味で、現世利益を願う護符的な性格を示している。

善導が「阿弥陀經」を書写しては長安の市民に配つて大衆教化に専念したことは明らか

なので、当然こうした大衆に理解し易い現世利益をかかげたものであらう。しかし断片の内容にはしきりと「得上品生専心者」のような句がちりばめられている。「又不命諸惡横得其便終時見仏上品……」と、点線の部分は欠落だが、また諸惡をして、よこ（横）しまにそのおとずれ（便）を得しめず、終時に見仏して、上品の……往生を達成させるという意味になることであらう。まさしく上品往生の尊さを善導が理想としていた事實が鮮明である。

上品の往生者は阿弥陀仏国で菩薩となり、穢土へ還相して阿弥陀仏の誓願を助業する役割をになうのである。善導が還相回向を浄土往生者の理想と考えていた事實がうかがい知れる断片と言うことが出来よう。

（つづく）

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 七月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十三年 六月二十五日 印刷
昭和六十三年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八一八二一八七番

待望の新刊

宮林雄彦編

『仏事と信仰生活・浄土宗』

◇◇◇ 浄土宗の檀信徒には必携の書!!

◇◇◇ 平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

四六判美装本 一四二ページ

定価八〇〇円(〒二〇〇円)

△発行・発売△ 図書出版(有) 群書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東東七一―六八七五九

第五十四巻

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年六月二十五日印刷 昭和六十二年七月一日発行